

omnividens

【オムニヴィデンス】



オウムガイ

自然史標本館1階展示室において、オウムガイ2個体を飼育展示しています。オウムガイは、現在のフィリピンからオーストラリア北縁の海域に分布し、昼は水深100mより深い海底にいて、夜になると海面近くまで餌を探りにうかんでくることがあります。自然界では死んだ魚やエビなどを食べるとされ、水槽内でもたくさんの触手を広げて餌を探す様子が見られます。7ページの関連記事をご覧ください。

下の写真はオウムガイの殻の断面。撮影:菊地美紀



ティレージウスと日本

— 19世紀における博物画の東西交流 —



東北学院大学教授
フリーダー・
ゾンダーマン

PROFILE
(Dr. Frieder Sondermann)
1949年生まれ
専門: ドイツ文学

ティレージウスとレザノフ

「1805年2月22日、金曜日。暖かな陽光。気温12度[摂氏15度]、だが風は強い。今日は何匹かの小魚が私のもとに運ばれてきた。それらには日本語の名前が添え書きされていたが、いくつかはウンベルクにもケンペルにも言及されていない。」

そのとき、ヴィルヘルム・ゴットリープ・ティレージウスは長崎港に浮かぶロシア帆船ナデジダ号の船上にいた。1769年ドイツのミュールハウゼンに生まれた彼は、自然科学者としてロシア初の世界一周航計画に参画していた。ロシア科学アカデミーは、動物、植物、鉱物、民族などの「新しい調査と学術的発見によって人類の知識を広げるために」科学者の参加を勧告したので、ナデジダ号には同じく自然科学者のラングスドルフや天文学者のホルナーも乗り込んでいた。

だがおそらく、後世の人びとにとって

もっとも有名な乗員は、ニコライ・レザノフであつたらう。彼は遣日ロシア使節として皇帝アレクサンドル一世の親書をたずさえていた。そして艦隊の隊長として、クルーゼンシュテルン船長率いる旗艦ナデジダ号に乗り込んでいたのである。ナデジダ号は1804年10月、長崎出島に來航した。

皆より年長であつたとはいえ、40歳になつたばかりのレザノフは、クルーゼンシュテルン船長とも、何人かの科学者たちとも、そりが合わなかつたようである。しかし彼は航海日誌のなかで、ティレージウスの描くスケッチにはひととき高い評価を与えていた。

「ティレージウス氏は、このとき私の前でみずからのスケッチの才能を示してくれた。彼は魚をまるで生きていけるかのように鮮やかな色彩で描き、その出来映えは、すぐに色を失ってしまう本物に取ってかわるだけの素晴らしいものであつた」。

事実、ティレージウスは自然科学者であると同時に、おそらくはライプツィヒ芸術アカデミーで絵画を学んだすぐれた画家でもあつた。このことは、帰国後1814年にロシアのサンクトペテルブルクにおいてクルーゼンシュテルンの『世界周航地図』が出版されると、すぐに世評によって証明された。この本にはティレージウスのスケッチをもとにした、80枚以上の版画が収められていたのである。



ティレージウスの肖像

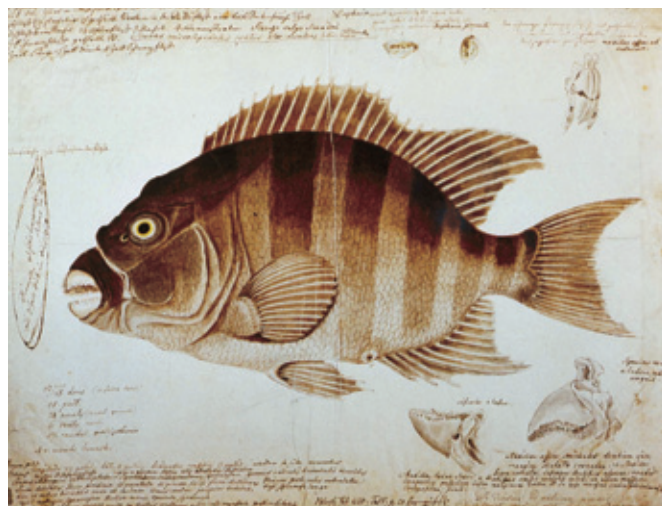
ティレージウスのスケッチ

もとより、版画とオリジナルのスケッチは、どうしても同じものにはなりにくい。ティレージウスは、つね日ごろ、ロシア人の銅版彫刻師は自分の図案を写しとるのがのろくて、しかも不完全だと苦言を呈していた。同業者のラングスドルフの能力もあまり評価していなかつたようである。高い自意識をもつ彼は、自分の能力をジェームス・クックの第二回世界周航に同行した画家ウィリアム・ホッジスとくらべて勝手にライバル視していた。そしてまた、この航海においてウンベルクやケンペルなど当時のヨーロッパにおける日本記述のスタンダードをくつがえてやろうという野心も抱いていた。冒頭に掲げた彼の日記には、その片鱗が見え隠れしている。

彼のオリジナルのスケッチは今も現存



長崎港から海を望む(ティレージウスのスケッチ)



インダイの観察記録(同左)

して、大半はロシアとドイツの図書館や文書館に収蔵されている。また、彼自身が友人たちや同僚への贈りものにしたせいで、一部は複製として市場にも出回っている。だがいずれにせよ、そのスケッチは一目でわれわれに、彼の画家としての能力を見せつけるだろう。多くの場合、その芸術的魅力は、記録としての価値や学術的価値にもまさっている。

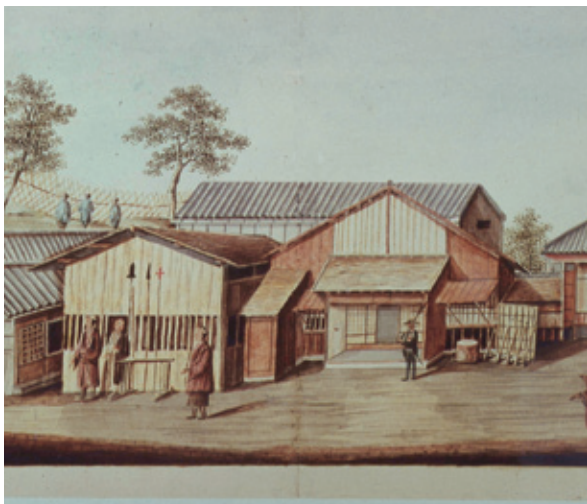
奇妙な慣行——図案の借用

とはいえ、われわれは、ある奇妙な慣行に気づく。ティレージウスの名が、じっさいに見たはずのない風景描写にも添えられていることがあるのだ。たとえば、彼はアメリカに足を踏み入れたことがないのに、ラングズドルフの著書をアラスカとカリフォルニアの風景画で飾っている。もっとも、肖像画などでは、別の画家のスタイルを借用することは当時一般的だったので、もとの図案がどうであれ、盗作とはみなされない。

しかし、あきらかに他人の無名の図案を写しとったものなのに、挿画の下に「ティレージウス博士が……現物を前にして描いた (Dr. Tilesius ... ad naturam pinxit)」などという添え書きがあるのは異例なことである。私は、そのようなものをライプツィヒ大学の美術品保管部 (Kustodie) の所蔵資料から発見してしまった。いったい長崎で、またサンクトペテルブルクで何がおこなわれたのだろうか。以下ではこれについてあきらかにしたい。

ティレージウスの長崎滞留

ナデジダ号は1804年10月から翌年4月まで長崎に滞留した。だが幕府の態度



ロシア使節団に当てがわれた梅ヶ崎の宿舎 (同)

は強硬であり、ロシア使節団には自由な上陸休暇が禁じられ、竹矢来で囲まれた梅ヶ崎の宿舎に軟禁されてしまった。結局交渉は不調に終わり、半年ものあいだ何の進展もなかった。ティレージウスはレザーノフとの仲がしっくりいかなかったため、上陸もせず船上にいた。ケンペルをこえる日本の総合的記述を意

気込んでいたにもかかわらず、このとき彼は、そのチャンスを永遠に失ってしまったことにまだ気づいていなかった。

しかしながらそのかわりに、「災い転じて福となす」という格言通り、ティレージウスはたつぷりと時間をかけて魚類学の研究をおこなうことができた。というのは、日本の役人は船上に残った乗員にも、梅ヶ崎宿舎にいる使節団にも食事のまかないをしたからである。そこには魚料理も含まれていた。ティレージウスは、それらをきれいに平らげる前に、「学術的に」記録した。彼の日記には何ページにもわたって、供された日本の魚とそれ以外の海の生物種についての記述がある。

「3月15日、金曜日。一匹のカサザメを入手。非常に美しいまだら模様があって、ヨーロッパ産のものとはことなっていた。さらに赤いまだらのある一匹のパーチ、何杯かのイカも入手。私はこれを解剖して、イカ墨を絵のために取っておいた。そして多数の小さなエビと魚も手に入れた。そのなかにはさまざまなツノガレイやモンガラカワハギもあった」。

ティレージウスは愛用の顕微鏡をなでながら、この窮屈な居住まいのなかでそうした仕事を成し遂げたことを誇りに思っていた。彼の遺稿のなかには、いずれ出



タコとイカと俳句を描いたティレージウスのスケッチ

版するつもりだったのだろう、未刊行のスケッチや草稿が多く見出される。それらは今ではライプツィヒ大学にあるが、ティレージウスの息子アドルフの遺言によれば、本来はミュールハウゼン市に譲渡された彼の遺産に付けくわえられるはずだった。

タコとイカ、そして俳句

そのなかの一枚に、大きくタコとイカが描かれたオリジナルのスケッチがある。とりわけ目を引くのは、そこに日本語で、俳句が書き付けられていることである。

ティレージウスは日本の言葉も文字も習得していなかった。だから自分でこの俳句を付けたとは考えにくい。したがって、さらに大きな疑問となるのは、スケッチ左下の「1805年、ティレージウス博士が日本の港、長崎にて見たままに描いた」(D. Tilesius ad vivum pinxit Nangasaki in portu Japonico. 1805) という添え書きである。

たしかに、彼のもとには幾度にもわたり、さまざまな海産物が届けられていた。たとえば、1805年3月4日付の日記には、こうある。

「今日は通訳の友人から多数のティンテンフィッシュ、すなわちモンゴウイカ、ケンサキイカ、トガリイカ(これを通訳はササイカと呼んでいる)およびダンゴイカ、そしてまた、大きなアナゴを受けとった」。

これらはすべて食事のまかないというわけではなく、どうやら通訳を介して、金品と引き替えに運ばせたという経緯もある

ようだ。「日本語の名前が添え書きされていた」という冒頭の記事の一節からは、そのさい、おそらくその生物に和名を記した紙片が添えられていたことがうかがわれる。日本語を解さなかったティレージウスにすれば、あるいはそれはローマ字か何かで記されていたのかもしれない。ただし、そうだとすればなおさら、そのスケッチに書き付けられた俳句の出所は謎である。

この俳句を「描いた」のはいったい誰なのだろうか。

トゥンベルク宛ての手紙

その手がかりは意外なところにあった。「日本紀行」、「日本植物誌」などで知られるスウェーデンの植物学者トゥンベルクに宛てた手紙である。ティレージウスは、当時滞在していた Санктペテルブルクから、1810年10月1日付でつぎのような手紙を書き送っている。

少し長くなるが、引用する。

「貴兄が1790年と1792年のストックホルム報告書、第13巻および第11巻に書かれた魚に該当するものは、ハナビヌメリ、ナマズ、パーチ、ハコフグ、ニベであります。……(これらの魚を私もすべて自分自身で長崎にて入手しております。)しかしながら、ハーレム報告のハウトゥイン[Houttuyn, Martinus、オランダの自然学者]の記述には、ひとつの挿図も見つけられませんでした。ラセペデ[Lacépède, Bernard Germain de、フランスの自然学者]の著書に載っているガンギエイとニシアンコウは長崎の港からも採取できますが、そのことをラセペデは知らないようです。いずれにしても、それらについては記述し直して、模写しなければなりません。……私は50から60種の魚を長崎の港で「見たままに」描きましたが、二つ折りの、丹念に彩色された木版画のついた美しい日本の書物を持っておりません[下線訳者]。貴兄がこれをお持ちでしたら、ここに添えた題名からおわかりになるはずです。東インド会社の外科医で長崎出島のオランダ商館付医官であるシュトゥツァー氏が、 Санктペテルブルクのロシア科学アカデミーに贈ったものです。

[右に日本語の縦書きで]

海幸天地 うみさちてんち……」

『海の幸』

ここでティレージウスが探していた書物が「海幸天地」なるものであったことが判明する。そしてこれを私は東北大学附属図書館の貴重図書の中に発見することができた。正確な題名は、『海の幸』であり、二巻本をそれぞれ「天の巻」、「地の巻」と表現している。名前からわかるように、これ

は食材となる魚介類を軽妙な俳句とともに描いたもので、図版は元禄生まれの書家、勝間竜水の手になる。石寿観秀国によって編纂され、初版は1762(宝暦12)年に江戸伊勢屋治右衛門と山崎金兵衛によって刷られた。これ以降の版もいくつが存在している。

先の手紙の続きにはこうある。

「……これはおそらくヨーロッパではきわめてめずらしい文芸的な印刷芸術として、銅版画などに起こす価値があります。これがふたたび私の手に入ることになれば、その企てを私は確実に自分自身でおこなうつもりです。これは私にとって楽しい義務になるでしょう。私が日本に読んで公にするものはすべて、まずは貴兄にお伝えします。その大半はクルーゼンシュテルンの作品の第4巻で印刷させます」。



梅ヶ崎付近に停泊する日本の商船(部分)

『海の幸』のタコとイカにかんするページを開いてみれば、ティレージウスがこの書物の入手に成功して、図版の模写をおこなったことは確実となる。現在ロシアに『海の幸』が所蔵されているかどうかは不明である。だが、彼はこれが日本の魚類研究にとって重要な資料だと考えたのである。

誰が俳句を描いたのか

さて、それではいつティレージウスは、これらの模写を制作したのだろうか。また、一見するとホンモノと見まちがうほど精緻に描かれた俳句の能書は、いったい誰によるものなのか。

この問題にはつぎのような推測が成り立つだろう。ティレージウスは1806年以降少なくとも1814年まで Санктペテルブルクに住んでいた。トゥンベルク宛ての



『海の幸』天の巻より「たこ」と「いいたこ」(東北大学附属図書館収蔵)



同「いか」

手紙からすれば、書物の入手は1810年10月以後ということになる。また、この時期にベルリン生まれの言語学者クラップロートも同じ町に住んでいた。当時サンクトペテルブルクに住んでいたドイツ人はそれほど多かったわけではない。ティレージウスとクラップロートは、1807年の年初から9月にかけて、そして1808年の年末から1811年の初めにかけて個人的に接触をもったことがわかっている。東洋の言語に長けていたクラップロートは、おそらくこの書物を見せられて、俳句の写しを作ったのだろう。そしてティレージウスが模写した図案にはめ込んだ。1810年10月から1811年初めにかけてのことだと推定される。図版のレイアウトがオリジナルの『海の幸』とことなっているのは、この共同作業のせいかもしれない。

だが、もうひとつの疑問が残る。クラップロートは、なぜこれほど精緻に日本語の能書を再現したのだろうか。

クラップロートがこの時点で日本の俳句を理解するだけの語学力をそなえていたかどうかはわからない。たしかに、彼は1805年にイルクーツクで、とある日本人と知り合い、彼の助けをかりて日本語の辞書をロシア語とドイツ語に翻訳している。しかしながらティレージウスに同行した自然学者ラングズドルフが1812年に出版した本の訳語に朱を入れたときは、個別の語義にかぎられていた。また、クラップロート自身が林子平の『三国通覧図説』(1786年)の訳書を7冊で出版したのは、ようやく1832年になってからであった。

したがって、『海の幸』の模写をおこなったときには、クラップロートはまだその意味内容を理解できていたとは言いがたい。つまり、意味がわからなかったからこそ、逆にホンモノそっくりな筆致を真似せざるをえなかったのではないだろうか。

『見たままに描いた』

ティレージウスが日本語を解さなかったことはすでに述べた。俳句の意味内容を理解するためには掛詞や日本の民間伝承の知識も不可欠であった。たとえば、「飯たこの 小智恵おかしや 栄螺から」という左ページ中央の俳句は、古の漁法に関係している。『和漢三才図会』には、「これ(飯蛸)を取るにサザエ殻を綱につ

ないで水中に投ずれば、久しくして鱧(たこ)は貝のなかに入る」とある。住み家とまちがえてノコノコとサザエの貝殻に入りこみ、漁師の策にはまる、その小賢しさが滑稽だというわけである。

最後に、ティレージウスは、なぜこの模写に、「1805年、ティレージウス博士が日本の港、長崎にて見たままに描いた」と添え書きしたのかについて考察してみたい。彼が別の魚の挿画においても他人の功績をわがものとしたのかどうかという問題は、よく考えてみる必要がある。そのためにはライプツィヒ大学に収められている資料を今いちど丹念に調べてみなければならないだろう。だが、ティレージウスは、日記の別の箇所において、ケンペルもトゥンベルクも日本の挿画を写しとっていながら告白していないと決めつけている。いっぽう、トゥンベルク宛ての手紙で『海の幸』を名指していることは、半ば公然と自身の秘密を打ち明けたともいえるだろう。日本の文字を添えた挿画は、それ自体では博物画として利用できなかった。だから、それらはクルーゼンシュテルンの『世界周航地図』にも受け容れられなかったのである。

しかし、もう一步考えを進めてみよう。

ティレージウスの模写にある、タコとイカの表皮の紋様の微細な観察は、本来の『海の幸』には存在しないものである。オリジナルの輪郭を借りて、彼はそこに自分の観察した表皮を科学的な正確さ、綿密さをもって描いている。右上段の隅にある四角形は、表皮の拡大図である。「見たままに描いた」(ad vivum pinxit)とは、こうしたことを指しているという解釈は、あまりに好意的すぎるだろうか。

極東から西欧へ

いずれにせよ、ティレージウスが日本の博物画に依拠していたという事実は、要するに、すでにケンペルとトゥンベルクをつうじて伝統となっていたひとつの慣習に彼もしたがっていたということなのである。これは、洋の東西のあいだの影響は、つねに西から東に向かっていたわけではないという証明でもある。その影響は交互に生じたのである。日本が西欧諸科学を学んだという「蘭学」の概念も、ひょっとすると、西から東へと一方通行

であったという印象を過度に与えすぎているかもしれない。このような慣習が西欧においてどのように普及し、またどのような影響をおよぼしたかについては、徹底した研究が待ち望まれるだろう。

(翻訳・構成 小川 知幸)

*Alle Bilder im Text nach Materialien der Kustodie der Universität Leipzig (mit Ausnahme von dem Porträt Tilesius' und den letzten zwei Bildern), mit Dank an Prof. Sterba. [ティレージウスの肖像と『海の幸』を除くすべての挿画はライプツィヒ大学美術品保管部所蔵資料による。シュテルバ教授のご協力に感謝いたします]

訳註

ティレージウスの日記中の生物種はラテン語の学名で記載されているが、翻訳にあたっては便宜上、和名を当てた。ただし今日の学名と正確に一致しないものもあり、今後の研究を俟たねばならない。イカの和名については永広昌之教授からご助言をいただいた。また、俳句の読解については大原理恵助教のご協力をいただいた。なお、誤りがあればその責は訳者にある。

翻訳にあたっての主要参考文献

- Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Seiner Kaiserl. Majestät Alexanders des Ersten auf den Schiffen Nadeshta und Newa unter dem Commando des Capitäns von der Kaiserl. Marine A.J. von Krusenstern, Berlin: Haude & Spener 1811-1812. 3 Bde.
- 山本俊太編『俳諧歳時記 春の部』改造社、1947年
- 荒俣宏『世界大博物図鑑 第二巻 魚類』平凡社、1989年
- 木崎良平『仙台漂流とレザノフ 幕末日露交渉史の一側面No.2』刀水書房、1997年
- レザノフ(大島幹雄 訳)『日本滞在日記1804-1805』岩波文庫、2000年

企画展「みちのくはアンモナイトの宝庫—東北大学のアンモナイト研究100年—」 公開講演会「身近にあった!アンモナイトの宝庫」を開催しました



総合学術博物館では、2009年10月6日(火)～10月31日(土)に、仙台市科学館との共催で、同エントランスホールを会場にして企画展「東北大学総合学術博物館のすべてX みちのくはアンモナイトの宝庫—東北大学のアンモナイト研究100年—」を開催しました。展示期間中の来館者数は、およそ8,300名でした。

“みちのく”(北上山地や阿武隈山地の東縁部)は、アンモナイト化石の“宝庫”といえます。古生代半ばのデボン紀から、恐竜が絶滅する中生代末の白亜紀までのすべての地質時代のアンモナイトが産出するのは、わが国では北上山地だけです。

東北大学では、1911年の理科大学の発足からアンモナイト研究をおこなってきました。その研究に用いられた、新種を含む多くのアンモナイト標本は総合学術博物館に収蔵されています。本展では、東北大学100年のアンモナイト研究をふりかえりながら、その成果としてのアンモナイト標本を多数展示し、アンモナイトの宝庫としての

“みちのく”の新たな魅力を紹介しました。

さらに、最近わが国で3個目の標本が発見されたヘリコプリオン(渦巻き状の歯をもつサメ)の歯の化石を特別展示しました。この化石は、何十という歯が渦巻状に並んだ非常に奇妙なかたちをしています。ヘリコプリオンは、この奇妙な歯を下あごにつけ、アンモナイトなどの獲物をとらえたり、切り裂いたり、殻をくだいたりしていたのではないかと考えられています。

その他、CTスキャンでアンモナイトを視るコーナーもあり、総合学術博物館で開発した、パソコン画面でアンモナイトの内部を自由に探検できるしくみを公開しました。また、「生きている化石」と呼ばれるオウムガイの飼育展示にも挑戦し、会場のマスコットとして、みなさまに親しまれました。

10月17日(土)の午前中には、企画展会場周辺にて化石鑑定会が開かれ、午後には体験コーナーとして、参加者を募ってアンモナイトのレプリカの作成をおこないました。鑑定会には、アンモナイトに加えて、

二枚貝や巻貝なども持ち込まれました。また、持参された化石には、自身で採集したもの以外に、外国土産の化石もありました。体験コーナーでは、40名ほどの参加者が、本物のアンモナイトを型取りして、人工樹脂の模型を作り、お土産として持ち帰りました。

また、10月31日(土)には、仙台市科学館2階特別展示室において、本展の解説書を執筆された永広昌之教授を講師に招き、公開講演会「身近にあった! アンモナイト化石の宝庫」を開催しました。永広教授は約2時間にわたって、東北大学におけるアンモナイト研究100年の歴史や、北上山地などでじっさいに発見されるアンモナイトの種類について、ご自身の研究成果もまじえて説明されました。会場には、58名の方が聴講にこられ、熱心にメモをとったり、講演後に質問をされたりしていました。



東北大学総合学術博物館 Information



「中国・朝鮮国境の大活火山 白頭山の謎」 巡回展を開催しました

昨年度、仙台市科学館で開催された企画展「中国・朝鮮国境の大活火山 白頭山の謎」が、全国火山系博物館連絡協議会の巡回展として、まずは2009年9月6日(日)～11月15日(日)の期間に、福島県の磐梯山噴火記念館で開催されました。

白頭山とは、中国と朝鮮の国境にあり、10世紀には歴史時代で最大級の噴火をした火山です。この時の噴火で当時

の渤海という国が壊滅したともいわれています。巡回展は、この白頭山について、東北大学東北アジア研究センターと中国および朝鮮の大学・研究機関が調査した結果を紹介する内容となっています。今後も、この展示は全国各地の博物館において開催される予定となっていますので、次回の開催が決まりましたら本紙にてご連絡いたします。



洪在上客員教授の公開講演会を開催しました

総合学術博物館と本学の生態適応グローバルCOEとの共同開催で、2009年11月17日(火)に公開講演会を開催しました。今回の講演会では、韓国仁荷大学海洋生物学科の教授で今年度博物館客員教授の洪在上博士にお話いただき、理学部生物地学共通講義室で約20名の学生・院生・教員が聴講しました。

講演題目は、「The Yellow Sea Tidal Flat: The World's Largest Coastal Landscape in Peril(黄海の干潟:危機に瀕する世界最大の沿岸域景観)」です。韓国西海岸に広がる黄海沿岸には、多くの固有の生物が生息しています。今回のご講演では、黄海における特殊な干潟環

境の成り立ちと、そこに生息するさまざまな生物について、非常に美しい画像の数々とともに紹介されました。

韓国は、緯度の範囲が北緯33度から38度までに限られ、日本に比べると国土面積も狭いのですが、干潟面積は日本の5倍近くあります。この広大な干潟の多くは、黄海沿岸の非常に大きな干満差によって作られたものです。これらの干潟には、その場所に特殊に適応したさまざまな種類の生物が棲んでいて、豊富な生物相と沿岸域景観を形成しています。

しかし近年では、日本における諫早湾干拓と同様に、黄海においても始華湖干拓やセマングム干拓などの、さまざまな大規模干拓

事業が進められており、それらが沿岸域景観や地域生態系に及ぼす影響が懸念されています。洪在上教授は、これらの海域において長年にわたるモニタリングを実施されており、現地の干潟で感じた危機について、ご自身の経験をもとに話されました。日本と韓国の干潟には共通点も多く、今後の共同研究の重要性を十分に理解できるご講演でした。



「ぐるぷか君」が、自然史標本館にやってきました



オウムガイの「ぐるぐる君」と「ぶかぶか君」が、自然史標本館1階の展示室にやってきました。企画展「みちのくはアンモナイトの宝庫—東北大学のアンモナイト研

究100年—」において、会場のマスコットとして大活躍した2個体のオウムガイです。彼らはその大役を見事に果たして、会期終了後に自然史標本館に引っ越してきました。

大きくて殻の色が薄いほうが「ぐるぐる君」で、小さくて殻の色が濃いほうが「ぶかぶか君」です。企画展を立ち上げる時には、ぶかぶか君の入ったビニール袋から輸送中に海水が漏れてしまうハプニングがあり、私たちをハラハラさせましたが、今ではすっかり元気になって、2日に1回与える餌

(エビなど)を奪い合うほどになりました。日頃は水槽でじっとして動かないことが多いのですが、餌をやった直後は触手を伸ばしてよく動きます。

オウムガイの仲間は、カンブリア紀後期(およそ5億年前)から化石が見つかるため、「生きている化石」とも呼ばれています。ぜひとも、自然史標本館にご来場いただき、水槽の前で悠久の時の流れを感じていただけましたら幸いです。

東 北 大 学 総 合 学 術 博 物 館
I n f o r m a t i o n



ミュージアム・トーク2010「アジア大陸を歩く」を開催します

今年度の公開講座ミュージアム・トークは、当館館長の永広昌之教授を講師として標記のテーマで開催いたします。アジア大陸は古い大陸の破片があつまったモザイクで、古い大陸と大陸のあいだや太平洋との境界部には、過去の海洋の記録を残す“衝突帯”や“収束帯”が存在します。永広教授は、東北日本の北上山地を中心に、このようなアジア大陸の形成過程を研究してきました。アジア大陸の成立過程をさぐる研究の一端を、4回シリーズでダイナミックにご紹介いたします。

突帯”や“収束帯”が存在します。永広教授は、東北日本の北上山地を中心に、このようなアジア大陸の形成過程を研究してきました。アジア大陸の成立過程をさぐる研究の一端を、4回シリーズでダイナミックにご紹介いたします。

第1回 2月27日(土)

「閉じられた海。大陸の成長のはじまり」

モンゴロオホーツク海は、シベリア古陸と北中国古陸のあいだにあった海です。この海の閉鎖=両大陸の衝突からアジア大陸の成長がはじまりました。

第3回 3月13日(土)

「衝突するインド。姿をなしたアジア大陸」

南半球にあった Gondwana 大陸の北縁から次々と大陸片が分離・北上し、アジア大陸に衝突しました。その最後の仕上げがインド大陸の衝突です。

第2回 3月6日(土)

「大絶滅・地球環境変遷を記録する地層」

ペルム紀-三畳紀境界は、地球の生命史上最大の大絶滅事変があった時代です。中国南部にはこの時期の浅海の堆積物がよく残されています。

第4回 3月20日(土)

「そして日本、南部北上古陸の形成」

北上山地の南半部~阿武隈山地東縁部は、古生代前期に大陸(南部北上古陸)となった、わが国でもっとも古い地質を残す地体です。北上山地から日本の生い立ちを考えます。

- ◎場 所/東北大学総合学術博物館(理学部自然史標本館)
- ◎定 員/各回30名(先着順)
- ◎時 間/各回15:00~16:20
- ◎参加費/入館料のみ(大人150円・子ども80円)
- ◎申し込み先/〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
東北大学総合学術博物館 ミュージアム・トーク係
TEL/FAX 022-795-6767

- ◎申し込み要領/下記の必要事項をご記入の上、往復ハガキまたはFAXにてお申し込みください。FAXでお申し込みの方には定員超過の場合のみ折り返しご連絡いたします。誠に申し訳ありませんが、電話でのお申し込みはご遠慮ください。
*お名前(ふりがな)連名可 *郵便番号・住所・電話番号 *参加ご希望日(複数日指定可ですが、必ずご参加できる日をご記入ください)

理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の建物については現在建設計画ですので、理学部自然史標本館を共用しています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

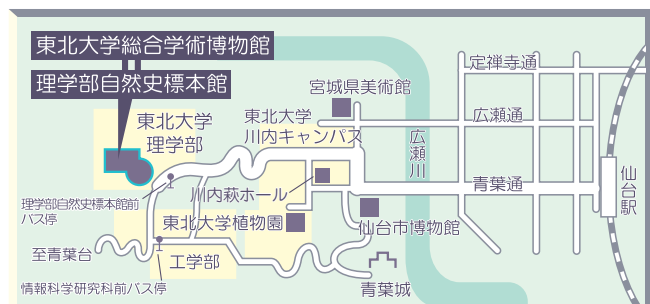
大人150円/小・中学生80円
(団体は大人120円、小・中学生60円)
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日*1;
お盆時期の数日*2、年末年始*2;
電気設備の点検日(年1回、例年夏季の土曜日か日曜日)*2
*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。
*2 日にちが確定次第ホームページでお知らせします。



- 交通手段
仙台駅西口バスプール
9番乗り場
所要時間約15分
料金220円
■青葉通・理・工学部-仙台城跡南
経由動物公園循環(系統719)
理学部自然史標本館前下車
徒歩1分
■青葉台または宮教大または
成田山行き(系統710, 713, 715)
情報科学研究科前下車徒歩4分
■仙台市観光シティーバス
「るーぶる仙台」も利用できます

総合学術博物館の
ホームページもご覧下さい。



東北大学総合学術博物館のホームページ
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東 北 大 学 総 合 学 術 博 物 館 THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax. 022-795-6767
©The Tohoku University Museum



【オムニヴィデンス】

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。